

桑田立斎

新年を迎え、屠蘇酒（元旦）、七草粥（7日）、小豆粥（15日）と邪気を払い、無病息災を祈る様々な行事が行われる。現代では、病気は病原菌等によって引き起こされると知られているが、かつては、人がもたらしたけがれに対する神の怒りの現れであり、死霊・悪霊の仕業と考えられていた。

赤い色は、魔よけとともに、天然痘除けとしても使われ、今も残る子供玩具の多くが赤いのは（例えば赤べこ：赤い牛の玩具）、天然痘除けである。種痘のない時代に、天然痘から逃れるすべはない。ひたすら神仏の加護を祈るのみであった。

エドワード・ジェンナー（Edward Jenner：1749～1823年）が発明した種痘法による天然痘の予防は1976年に完成し、論文は1798年に出されている。オットー・モーニッケ（Otto G.J.Mohnicke：1814～87年）によって公式に我が国に病苗がもたらされたのは1849（嘉永2）年のことである。その後、日野鼎哉（1797～1850年）、楢林宋建（1802～52年）、笠原良策（1809～80年）、桑田立斎（1811～68年）、緒方洪庵（1810～63年）などの蘭方医が血の滲むような苦勞をして、この普及に貢献している。

緒方洪庵が1838（天保9）年に大坂で開いた適塾については、2010年4月号の本欄で紹介した¹⁾。

桑田立斎は江戸深川の満年橋の畔で小児科医院を開業していたが、牛痘法の意義をいち早く認めて6万人に種痘接種を行った。1857（安政4）年には、蝦夷地開発政策の一環としてアイヌに牛痘接種する幕命により、函館から国後島まで6,400名余りのアイヌ人に種痘を実施した。

牛痘接種をすれば牛になるという誤解を正し、種痘の効果について解説したのが「牛痘發蒙」である。扉絵の挿画は、牛に乗った“保赤牛痘菩薩”が、疱瘡の悪魔を踏みしめ、幼児に救いの手を差し伸べる様子を描いている（写真1²⁾）。

東京都江東区清澄に、桑田立斎先生顕彰会がジェ



写真1 牛痘發蒙（東京大学医学図書館デジタル史料室）



写真2 桑田立斎供養墓（保元寺）

ンナー種痘発明200年を記念して平成10年に建立した“桑田立斎先生種痘所之跡”碑が雑踏の中に埋もれるように建っている。また、東京都台東区橋場の保元寺には、桑田立斎の供養墓がある（写真2）。

■ 参考資料 ■

- 1) 諸澄邦彦，緒方洪庵と適塾，*Isotope News*, No.672, 18 (2010)
- 2) 東京大学医学図書館デジタル史料室，牛痘發蒙，p.2 (1849)

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕